



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	赤津隆助の図画教育思想とその実践(全文の要約)
Author(s)	増田,金吾
Citation	
Issue Date	2018-03-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/150889">http://hdl.handle.net/2309/150889</a>
Publisher	
Rights	

## 論文題目 赤津隆助の図画教育思想とその実践

申請論文「赤津隆助の図画教育思想とその実践」は、戦前、東京府師範学校、東京府青山師範学校、官立東京第一師範学校（以下、原則としてこれらをまとめて「東京府青山師範学校」と言う）において図画教育を行い、多くの優れた美術教育家を育てた赤津隆助(1880～1948)の図画教育思想とその指導法に基づく実践を精査し、その思想や実践の特質と美術教育史的意義を検討したものである。赤津は、美術教育史上必ずしも著名とは言えないが、研究対象に値する人物であると捉え研究を行った。

本論文は、序章. 研究の課題、第1章. 赤津隆助が師範学校卒業までに受けた教育、第2章. 赤津隆助が師範学校附属小学校で行った教育-明治時代後期の東京府師範学校附属小学校における図画教育-、第3章. 赤津隆助と師範学校教育(教師教育)、第4章. 赤津隆助の制作活動等、第5章. 赤津隆助を巡る美術教育思潮、第6章. 赤津隆助の育てた美術教育家たち、そして終章. 赤津隆助の図画教育思想とその実践(結論)、よりなっている。これに資料1. 赤津隆助と図画教育との関係表、資料2. 参考写真、を付している。

以下、各章ごとにその要点をまとめ、論述することにより本論文の要約を行うこととする。

先ず序章では、最初に、本研究の目的と意義について述べた。次に、赤津隆助の著書・論文の一覧表により、執筆活動に関する全容を明示し(赤津の著書・論文数は220本を超える)、年代別に執筆の変遷について概観した。そして、先行研究について触れ、赤津隆助そのものに関する先行研究については、その問題点について言及した。その後、本研究の方法、論文の構成を示している。

次に、第1章では、最初に、赤津隆助が師範学校入学までに受けた図画教育について精査した。これによって、一地方のこと(赤津の出身地、福島県)ではあるが、明治20年代の我が国の小学校を中心とした図画教育の実態を明らかにすることができた。また、当時赤津が学んだ図画の教科書を特定し、その主なものの一つ『日本画鑑(かがみ)』について検証した。

そして、明治時代中期から後期にかけて赤津が師範学校時代に受けた教育について、その状況を明らかにした。当時、東京府青山師範学校第3学年までの図画の授業では、写生・図案・創作などは一度も指導されず赤津は図画に魅力を感じなかったが、第4学年で指導者が変わり、実物写生が行われるようになってから面白味を感じたという。

第2章では、最初に、赤津隆助が教師となって間もなく指導を受け、その後の赤津の図画教育指導法に影響を与えた白浜徹との関係について触れた。そして、赤津が東京府青山

師範学校附属小学校において行った教育について精査した。その結果、明治後期の東京府青山師範学校附属小学校の教授細目等における図画指導の実態が明らかになった。また、東京府青山師範学校附属小学校図画科の、国定教科書への対応の実態を明らかにした。第一期国定教科書（各期の時代区分は、山形寛による）だけでなく、第二期国定教科書の一つ『新定画帖』も詳しく調査した上で赤津は東京府青山師範学校附属小学校で、また本校においてもこれを使用しなかった、ということが判明した。それは、赤津自身の公的な記述（『新興美育』1937）、東京府青山師範学校附属小学校編『尋常小学各科教授細目 第三編』（1911）などから判断できる。

教科書不使用の背景には、赤津の確固とした考えに加えて、校長滝沢菊太郎や主事の理解があったことが推測できる。『新定画帖』教師用書は、参考としては用いたが、東京府青山師範学校附属小学校独自の教授細目を基に、指導がなされていたのである。

東京府青山師範学校附属小学校の教授細目には、『新定画帖』にプラスされる多くの有益な指導法があることが分かった。特に、やがてやって来る写生を中心とする自由画教育時代を前にして、ここでの指導が「臨画」と「写生」とを可能な限り明確に区別して臨んだ点は評価できよう。そして、それは弾力性を持ち、創造主義的要素の見られる指導法であった。これらのことにより、次の時代へと一歩踏み出しているものを見つけることができた。

第3章では、明治時代後期から昭和戦前期までの師範学校教育の検討、明治期・大正期・昭和戦前期の師範学校における各時期の教育内容の比較、明治時代後期から昭和戦前期までの東京府青山師範学校の教育内容についての検討を行った上で、授業における赤津隆助の図画の指導法や評価法を明らかにした。

赤津の、図画の指導の主な特徴としては、図画教科書を生徒に手本としては使用させずに「黒板画」の指導等に力を注ぎつつ、生徒の自由を尊重する教授をしていたことが挙げられる。これは創造主義の立場に立つ写生を中心としたものであるが、背景には造形主義に基づく指導法や生活主義に基づく理念があった。

また、評価については、子どもを本当に思う気持ちのあることが、第一であるとする。それには、教師の人格が重要であると言う。続けて、赤津は教育者としての姿勢を説き、評価方法は、指導法と同じく、人、時、場合により違って来るもので、一概にその仕方や、方法などを述べることは出来ない、と言う。これは、いわゆる創造主義的な考え方である。

さらに、赤津の指導の仕方の特徴でもあるが、指導を行う場所や機会は教室以外の寄宿舎等でも可能で、全体的な機会における教育が重要であると赤津は考えていた。

第4章では、最初に、赤津隆助の制作活動等について調べ、論じ、赤津のスケッチを含む絵画作品を示して制作の実態を明らかにした。次に、赤津の作った教科書、著作兼発行者文部省『師範図画』、関東大学教育美術連盟編『新図画工作』について触れた。

戦前、図画の教科書を使用しなかった赤津が、ここへ来て自ら図画の教科書を作成しようとした理由の一つには、文部省より師範学校図画教科書編集委員を委嘱されたということがあるだろう。また、昭和18年（1943）の師範学校官立専門学校昇格に伴い、赤津は「関東師範美術連盟」を組織し、理事長に推された。この事業の中に、学生を中心とした美術展覧会開催と小・中学校の教科書編集発行があった、ということも理由に挙げられよう。

一方で、赤津は昭和7年（1932）、世界の主要都市を巡り、各当局や斯界の有力者と会見して、携行した児童生徒作品等の贈呈や展覧会開催の交渉を行い、帰国後は欧米図画教育の実態を紹介するなどの成果を残した。こうした赤津の外国出張について、実態を明らかにした。その他、幼児教育にも赤津が貢献したことに触れた。

第5章では、最初に、赤津隆助を巡る美術教育における基本的三主張（思潮）である創造主義、造形主義、生活主義について概略を述べた。その上で、創造主義に関わる山本鼎の自由画教育と赤津の考え方との関係について論じた。赤津は山本の目的論については賛成するが、方法論については反対している。しかも、山本に方法的改造案を望むのは無理だと赤津は捉えた。また、山本が選んだ児童画作品は近代洋画に偏向していること、山本が従来 of 図画教育は全部お手本主義であるとか、図画教育の方法は自由画を描かせるより他ないとかなど、極端な論を述べていること、そして山本の具体的な教授法の軽視や無視などを赤津は問題点として指摘している。

次に、造形主義に関わる新図画教育会と赤津との関係について論じた。赤津は新図画教育会で重要な位置を占める同人でもあった。赤津は、物の形や色を通しての造形芸術陶冶の重要性述べ、心の教育を重視している。加えて、新図画教育会を通じて造形主義美術教育に基づく明確な指導法を示している。

そして、生活主義に関わる想画と赤津との関係性については、熱心な図画教育が行われていた山形県長瀬小学校の児童を励まし、同校教師には郷土教育に基づく思想的自信を赤津が与えていた点が、挙げられる。特に、赤津は、地方色豊かな自己の環境としての生活観と自主性を認め、子供たちの見た生の声を認める捉え方をしている。

第6章では、最初、赤津隆助自身の特徴を「教育全般に関わる部分」と「図画教育に関わる部分」とについて挙げた。その後、赤津隆助が育てた美術教育家たちのうち、代表的な卒業生3名、武井勝雄・倉田三郎・箕田源二郎を取り上げた。美術教育、教育、美術を中心に、彼らの行った行動や足跡についてその特徴を示した。これらの特徴を、赤津との影響関係により分析・考察した。

赤津の影響が多く見られたが、意外であったのは、構成教育を進めた武井勝雄が、「想画が造形構成の基礎である感覚訓練をも併せて考えている」と指摘している点、特定の主張に肩入れしない倉田三郎がバウハウスの理論に学んで構成教育の実践に早くから取り組んでいた点などである。一方、箕田源二郎が赤津から日常の現実を直視した図画の捉え方を学び、加えて教育批判の姿勢を強く受け継いでいることも重要である。

何れにしても、3名の中には、赤津の教えが皆生きていている。それがそれぞれ大きく成長している姿を明確に示すことによって、赤津の図画教育思想とその指導法の有効性が検証できたということでもある。

終章では、「赤津隆助の図画教育思想とその実践」の結論を示した。その後、赤津隆助からの示唆を加えた。

結論は、以下の通りである。赤津隆助は、新図画教育会を通じて造形主義に基づく明確な指導法を示し、山本鼎よりも早い時期に写生を中心とした個性尊重の創造主義美術教育を行い、想画教育すなわち生活主義美術教育の発展に尽くした。最終目標は心の教育（人間教育）であった。赤津の図画教育思想は、視野が広くかつ一点に集約される強固なものであり、当人はそれを実践していた。赤津は、戦前期における「美術教育指導法」を確立し、それを通して優れた美術教育を行っていた。